

[9]

氏名	はやし ひでお 林 日出男
博士の専攻分野の名称	博士(外国語教育学)
学位記番号	博第 475 号
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	動機づけ視点で見る日本人の英語学習 ー内発的・外発的動機づけを軸にー
論文審査委員	主査教授 竹内 理 副査教授 八島 智子 副査教授 山崎 直樹 専門審査委員 准教授 廣森 友人 (明治大学)

論文内容の要旨

林日出男氏の博士学位請求論文「動機づけ視点で見る日本人の英語学習ー内発的・外発的動機づけを軸にー」は、自己決定理論 (Self-determination Theory: SDT) の枠組みを利用し、内発的・外発的動機づけの視点から、日本人の中学・高校・大学にわたる英語学習を観察・分析したもので、9つの実証研究を中核として、以下の全 10 章から構成されている。

第 1 章: 研究背景

第 2 章: 自己決定理論に見る内発的・外発的動機づけ

第 3 章: 中高大にわたる英語学習動機づけの推移パターン

第 4 章: 学習者クラスター別に見る高校後半での英語学習動機づけ

第 5 章: 自己決定理論に基づく大学生用英語学習動機づけ尺度の作成

第 6 章: 大学後半での英語必要性自覚の動機づけ上の役割

第 7 章: 内発的・外発的動機づけの並列論的考察

第 8 章: 学習者クラスター別に見る高校後半での自己調整ストラテジー

第 9 章: 二人の英語学習者に見る成功への内発的・外発的動機づけルート

第 10 章: 総括

参考文献

第 1 章では、まず外国語習得研究における動機づけ研究の出発点といえる R. C. Gardner の社会教育モデルの概説を行い、その後、それが直面した問題点、そして Gardner の反論と修正の変遷について述べている。加えて、Gardner 以後のいくつかの展開にも触

れ、本論文の導入としている。

第2章では、本論文を通しての理論的基盤となる E. L. Deci と R. M. Ryan の自己決定理論の枠組みに基づき、内発的・外発的動機づけを概観している。具体的には、内発的動機づけ・外発的動機づけを、自己決定レベルによる連続性のあるものとして分類・定義し、動機づけをより自己決定的（自律的）なものにする条件および働きかけは何なのかを、文献に基づきまとめている。

第3章では、回想法により、大学生英語学習者に、中学時代からの英語学習動機づけ推移を回答させ、いくつかの推移パターン群に分け、各パターン群の変化を生む原因を、内発的・外発的動機づけの視点から探っている。その結果、クラスター分析で表れた「高一高」「高一低」「低一高」「低一低」群のうち、(1) 研究の時点で高動機づけ状態を達成するに至った「高一高」「低一高」両群で、内発的動機づけと並行して外発的動機づけの上昇が過去に見られたこと、(2) 「高一高」群で一時低下した内発的動機づけの再上昇が受験勉強時代に見られたことから、外的価値体系の内在化が内発的動機づけの維持・向上をサポートしている可能性があるとして、林氏は指摘している。また、(3) 動機づけが下降する推移をたどった「高一低」群では、入試などの外的圧力が負の力になって働き、内在化が不成功に終わったのと同時に、内発的動機づけの低下も起こっており、「高一高」「低一高」両群での結果を考え合わせると、内発的・外発的動機づけ双方向に、何らかの影響関係のあることがうかがえるという。

第4章では、外発的動機づけと内発的動機づけ上の重大な変化が発生すると考えられた高校高学年の時期（高3）の生徒を対象として調査を行っている。高校生用の英語学習自己決定尺度を作成し、その下位尺度と基準変数との関係を調べたところ、進路充足のための同一視的調整が、学習意欲・学習時間に最大の関与をしている様子が見られた。また、学習者4群の特徴分析では、「高一高」群が、内発的にも外発的にも、英語を長期的で自然な視野でとらえることで高度な自律性を達成している点に特徴があるのに対し、「低一高」群が、大学入試という人為的な目前の目標を意識することで、内発的・外発的両面にわたる高い自律度を達成している点に特徴のあることが分かった。さらに、「高一低」群には外的調整の高さ、「低一低」群には内発的動機づけの低さと無動機の高さに、それぞれ特徴が見られたと報告されている。

第5章では、大学生対象の研究に使用するために、自己決定理論の枠組みでの大学生用の英語学習動機づけ尺度の作成を行っている。下位尺度作成のための研究Ⅰと、妥当性・信頼性検証のための研究Ⅱをへて完成した尺度は、一部の下位尺度（取入れ的調整）の信頼性が低いなどの問題を残すものの、おおむね良好なものであることが確認できている。

第6章では、就職活動を控えた大学生活後半の時期を取り上げ、その時期に特徴的な働きをすると考えられる3種の英語必要性自覚と動機づけとの関係を、質問紙調査により探

っている。それによると、就職活動を直前に控えたこの時期において、大学生の英語学習動機づけに最大の関与をしているのは、就職・進路のための英語必要性自覚でも、授業のための英語必要性自覚でもなく、内発的動機づけを主たる背景とする日常生活のための英語必要性自覚であったという。また、期待された就職・進路のための英語必要性自覚は、動機づけ要因としては二次的なものであったという。それに続く学習者4群の特徴分析では、「高一高」群に英語との自然な融合、「低一高」群に就職活動上の英語重要性の内在化、「高一低」群にその内在化の不成功、「低一低」群に無動機を反映した（英語必要性自覚上の）特徴が見られたという。

第7章では、内発的動機づけと外発的動機づけとの関係を、心理学の文献に基づき考察している。外発的動機づけが内発的動機づけに対立するものではなく、両者がプラス効果を有し、共存が可能と考えられることを、Deci & Ryan と Cameron らの研究から紹介し、特に自己決定型の外発的動機づけは、内発的動機づけとともに、自律性の高い動機づけの二本柱（軸）を構成するものと考えられる（Hidi, 2000 など）、と主張している。この主張は、「遂行目標と熟達目標」、「状況的興味と個人的興味」、「目標達成への興味と自然発生的興味」それぞれにおいて、より外発的とされるものとより内発的とされるものの両輪的役割を認める指摘（Barron & Harackiewicz, 2000; Hidi & Harackiewicz, 2000; Rathunde, 1993 など）があることからサポートされるという。このような考察を受けて、林氏は、内発的・外発的動機づけが並列的に自律的動機づけを育む役割を担い、両者間には循環的影響関係があるとするモデルを提示している。

第8章では、EFL環境での英語学習にとりわけ重要な役割を持つと考えられる自己調整を取り上げ、入試を控えた高校3年生時に、4クラスターそれぞれが見せる自己調整ストラテジー使用上の特徴を探っている。第4章と同じ研究参加高校生への質問紙調査により、5種の下位尺度で構成される自己調整ストラテジー尺度が作成され、それをもちいた分析により、4学習者クラスターそれぞれの特徴が示された。それによると、「高一高」群は、いずれも内発的動機づけを背景に持つ「自己効力感の強化」と「興味の強化」ストラテジーの多用が特徴であるのに対し、「低一高」群は外発的動機づけを背景に持つ「外発的調整」の多用に特徴が見られた。また、「高一低」群は、（「高一高」群とは逆に）「自己効力感の強化」と「興味の強化」ストラテジー使用の低さに特徴があり、内発的動機づけの低さを物語ると同時に、「外発的調整」の使用状況から、入試圧力の影響がうかがえるという。「低一低」群は、全ての自己調整ストラテジー使用が低く、努力放棄状態にあると判断された。

第9章では、内発的動機づけと自己決定型外発的動機づけという、ともに自律性の高い動機づけの、どちらか一方への偏りを見せる対照的な二人の大学生を、ケース・スタディーという形で分析している。面接および質問紙尺度による調査を通して、内発的動機づけ偏重型の学生Aには、一貫して自らの英語への興味を尊重し、英語に触れることの楽しい

部分に専念する姿勢が見られた。同時に、留学予定先での優位な条件を得ることを目指した自己決定型外発的動機づけの発生も見られた。自己決定型外発的動機づけへの偏りを特徴とする学生 B では、高度な進学教育体制の中で、外圧を内在化させて行った様子が明らかになったが、本来この学生が持っている英語への深い興味や、受験勉強のさなかに感じた完遂・知識のための内発的動機づけの関与も見られた。両者は異なる意味での英語学習成功者であるが、それぞれに内発的・外発的両動機づけの相互影響関係があったことも分かった。

最終章（第 10 章）では、ここまでの研究を総括したのち、その問題点や限界点を指摘しながらも、内発的・外発的動機づけ 2 軸論のモデルを展開・発展させ、自律的取り組みを生む自己決定型外発的動機づけに、より一層目を向ける必要があることを訴え、本稿を閉じている。

論文審査結果の要旨

論文の受理および審査の経緯

平成 25 年 12 月 1 日付で、林日出男氏より「論文提出による博士号の授与」を求める請求が出された。同請求には 5 名の外国語教育学研究科教員（2 名以上の後期課程演習教員を含む）の推薦状が添付されており、その他の要件も満たしていたため、研究科長ならびに研究科担当副学部長が内見を行った。この報告をうけ、平成 26 年 1 月 15 日開催の第 17 回研究科委員会にて慎重審議を行なった結果、受理審査委員会を設置することが承認された。受理審査委員会（主査：竹内 理、副査：八島智子、山崎直樹）は、本研究科の定める「博士論文（論文博士）審査に関する内規」の基準に照らし、同氏が論文提出の資格を有するか否か、また、その論文が受理相当の内容であるかどうかを審査した。その結果、1）論文数（査読付き国際研究誌・国内学会誌に 3 編以上、関連論文 5 編以上）、2）学会発表数（国際学会・国内学会全国大会で 3 回以上）、3）研究歴（おおむね 10 年以上）、4）学位領域（外国語教育学との関連性）のすべてにおいて、受理基準を十分に満たしていることが確認されたため、平成 26 年 2 月 26 日開催の第 19 回研究科委員会に報告し、同氏の博士論文受理に関して全会一致で承認を得た。これを受けて、平成 26 年 3 月 17 日には、博士学位請求論文が所定の様式で林氏より提出されたため、同日付で受理し、論文審査委員会（平成 26 年 2 月 14 日開催第 18 回研究科委員会で承認済み）が審査に入った。なお、論文審査委員会には、外国語教育学における動機づけ研究で精力的な活動をされている廣森友人氏（明治大学准教授、博士（国際広報メディア））を外部審査委員として招聘し、論文審査過程の透明性・信頼性を高めることとした（前述第 18 回研究科委員会で承認済み）。

論文審査結果

提出された博士学位請求論文（和文 201 頁）は、手堅い手法で行われた実証研究の結果にもとづいており、その中で報告されている様々な知見は、日本の英語教育にとってきわ

めて示唆に富む内容となっている。

まず研究手法であるが、本学位請求論文では、質問紙でのデータ収集とその統計的分析を中心とする量的研究手法だけでなく、インタビューを中心とするケース・スタディーも採用することで、トライアングレーションを実現しており、より正確に動機づけの実態に迫ろうとする林氏の研究姿勢を体現するものとして評価に値する。また、実証研究の結果を理論の枠組みとすり合わせ、その齟齬を埋めるという手法も、特筆すべきアプローチと言えよう。

これらに加えて、研究結果の汎用性が高いことも指摘しておく必要がある。本論文から得られた知見は、英語教育の実践的側面はもちろんのこと、英語教育学を越えて、心理学、教育学にも理論面で有益な知見をもたらし得るものであり、その意味で、研究の広がり強く感じられる好論文といえよう。

上記以外にも、本論文の特徴として、(1) 一連の実証研究の中に、長年にわたる研究の継続性が示されていること、(2) 過度な主張を行わず、堅実な事実の積み重ねが基盤となっていること、(3) 博士論文の基となった論文の一部が、**Multilingual Matters** 社から刊行されている専門書 **Language Learning Motivation in Japan** に掲載されており、国際性が認められること、(4) 国内最大の英語教育学の学会である大学英語教育学会 (JACET) において、本博士論文と同一のテーマで学術賞 (平成 25 年度) を授与されていること、なども指摘しておきたい。